# 幸田露伴『努力論』における「幸福三説」について

## On the Three Theories of Happiness in Kouda Rohan's *Doryokuron*

笠 井　哲
福島工業高等専門学校一般教科
Akira Kasai
Fukushima National College of Technology, Department of General Education

（2014 年 8 月 28 日受理）

Kouda Rohan is a great writer in the Meiji period. The purpose of this paper is to consider the three theories of happiness in Koda Rohan's *Doryokuron*. The three theories of happiness in Kouda Rohan's *Doryokuron* have the unique originality in other eudemonics. Besides, it may be said that the thought of Rohan can have the modern significance as the pioneer thought of intergenerational ethics.

**Key words:** Kouda Rohan, three theories of happiness, Doryokuron, eudemonics, intergenerational ethics

### 1. はじめに—『努力論』は幸福論—

小説『五重塔』で知られる明治の文豪・幸田露伴（1867－1947）は、慶応３年明治維新の前年の生まれで、同じ年に夏目漱石（1867－1916）、尾崎紅葉（1867－1903）、正岡子規（1867－1902）も生まれている。

露伴は、家の経済状況が最悪の時に遭遇したため、いわゆるエリートコースから脱落してしまう。しかし、深い教養と該博な知識に基づく鋭い洞察力と洗練された文章は、他の追随を許さず、後に第１回文化勲章を受章している。

露伴が亡くなった時に、時の慶応義塾塾長の小泉新三（1888－1966）が「百年に一度の頭脳」[1]、すなわち、露伴のことを「百年に一度しか出現しない頭脳の持ち主」であった、と新聞に書いてその死を悼んだという。

管見によれば、露伴の研究者たちは、彼の小説は評価しても、随筆には目を向けない傾向があったようである。しかし近年、露伴の修養について書かれた随筆、特に『努力論』が注目されてきている。露伴はこの書で、「言葉（漢字）の威力」を巧みに利用している。例えば、序においては「努力」そのものの定義にしても、性質の違いから「間接の努力」と「直接の努力」の二つに分けている[2]。『努力論』は、人生の明暗、幸不幸を様々な角度から検討し、どうしたら明るくのびやかな気分で、勢いよくのびやかに生きられるかを論じている。

露伴がこのような問題について書いたのは、これを著した明治の末頃は、事業の不成功や失業、志を遂げないとか貧困とか、様々な外的原因ゆえに自らを不幸と思い込み、悩み苦しみ、陰惨な思いに沈んでいる人があまりに多く、それを見かねたからだという。

露伴は本書が岩波文庫に入った際、その「跋」に、気の持ちよう次第でいかにも明るくのびやかに生きられることを伝えたかったと記している。本書の主意を最もよく伝えているので、ここに引用する。「主意は当時の人々の功を立て業を成さんと欲するあまりに、不如意のこと常に七、八分なる世にありて、徒らに自ら悩み苦みて、朗らかに爽やかなるを能わざる多き悲しみ、心の取りかた次第にて、さように陰惨なる思のみを持たずとも、陽叙の態を有して、のびのびと勢よく日を送り、楽しく生を遂げ得べきものをと、いささか筆墨を鼓して、苦を転じて楽と為し、勇健の意気を以て懊悩焦燥の態度を払拭せんことを勧めたまでであった」[3]。

要するに、如何なる心がけで生きれば、人は人生を肯定的に生きられるかを説いたのである。その意味で露伴の『努力論』は、彼の幸福論である。それがヒルティ（1833－1909）やアラン（1868－1951）やラッセル（1872－1970）の西洋の三大幸福論と異なるのは、どこであろうか。それは、露伴が「幸福三説」を持ち出す点である。本稿の目的は、幸田露伴の『努力論』における「幸福三説」について考察することである。

## 2. 『努力論』とその背景

露伴は、この頃盛んに『新修養』や『向上』など、修養雑誌に書いていた。『努力論』の初版は、東亜堂書房より明治45年（1912）7月23日に刊行されている。実は、この東亜堂書房は修養ものを手がけて大当たりをとった。当時の修養書を代表する一つで、仏教論壇の第一人者、加藤咄堂（1870－1949）による『修養論』がベストセラーになったという[4]。

なぜ、それほど「修養」は流行ったのであろうか。まず、日清戦争後から坐禅が流行り始めたという。露伴は、それ以前1890年に坐っている。露伴より少し早く、西田幾多郎（1870－1945）が金沢で坐っている。そして、1891年、鈴木貞太郎（1870－1966）が鎌倉・円覚寺の今北洪川（1816－1892）に師事し、洪川没後は釈宗演（1860－1919）について、大拙の号を受けた。夏目漱石は1894年に、その釈宗演についている。

こうした青年の煩悶に対処する物として「修養」が流行ったのである。キリスト教の立場からは新渡戸稲造、仏教では加藤咄堂のものが代表的で、陽明学は『陽明』という雑誌を出した。新時代に必要な「修養」は、英語の culture ないしはドイツ語の Building にあたるとされ、「宇宙の本体」が説かれもするし、国民の道徳にも及ぶのであるが、その中身を一言でいえば、「人性」の根本を学び、心身を鍛えるということに尽きるという。

この「修養」の季節こそ、露伴の『努力論』が、多くの読者を獲得した背景である。明治時代の立身出世は、震災後大衆雑誌『キング』に受け継がれるが、修養の考えも継承され、『努力論』が読み継がれることになった。しかし、他の修養書が廃れたのに対して、『努力論』が長い間読まれ続けたのは、他にも理由がある。鈴木貞美は、次のように書いている。

> 幸田露伴『努力論』は古今東西の思想をよく精錬したアマルガムでした。これを生んだ精神史的背景としては、ヨーロッパの世紀転換期に起こった学の総合化の機運が、日本にも伝わっていたこと、そして、日露戦争後、「日本の使命」として、東西文明の融合ないしは調和が知識層の課題となっていたことをあげるべきでしょう[5]。

また、次のようにもいっている。

> 『努力論』が、岩波文庫の一冊として刊行されたのは、一時期の若い知識層を熱病のようにとらえたマルクス主義が退潮し、「日本的なるもの」「東洋的なるもの」に関心が移った時期のことです。そこに店主と露伴とのつきあいが働いたにしても、時流が作用していることは、否定できないでしょう[6]。

以上のように、露伴にとって幸運が働いたことは間違いない。

## 3. 運命と自己革新

露伴の「幸福三説」の検討に先立って、「運命と自己革新」について論究しておきたい。

この世の中は、成功者と失敗者に色分けされるものである。失敗者は、失敗したいと願って失敗者になるわけではない。しかし、気がついてみると、いつの間にか自分が失敗者の側に立っていることに気づく。

では、何が世の中の成功者と失敗者を分けているのであろうか。露伴はここでその法則を見出そうとする。露伴によれば、「注意深き観察者となつて、世間の実際を見渡し」[7]てみることによって、その「灸所」を見出すことができるというのである。では露伴は、如何なる「灸所」を発見したのであろうか。

露伴は、成功者と失敗者には次のような特徴があるという。世に成功者といわれる人は、自分の意志や知略や勤勉や人徳の力によって好結果を納めることができたと信じている。一方、失敗者は、自分は何も悪くないが、運命が悪かったために失敗してしまったと嘆いている。すなわち、成功者は「自己の力」として運命を解釈し、失敗者は「運命の力」として自己を解釈しているのであるという。露伴は、この二つの解釈はどちらが正しく、どちらが間違っているというものではないという[8]。運命そのものの本質は、誰にもわからないものだからである。

しかし、運命と人間との関係については、よく観察すれば把握することができる。それによって、ある程度の確率で運命を自分の方に引き寄せることもできるのではないだろうか。そして、そのようにして観察をした結果、露伴は、大きな成功を遂げた人は、失敗を人のせいにするのではなく自分のせいにするという傾向が強い、ということを発見するのである。

露伴は、これを堤防の決壊という例を挙げながら説明している[9]。

川が氾濫して左岸の堤防が決壊し、畑が駄目になってしまった。一方、右岸の堤防は決壊を免れ、そこにある畑も救われた。運ということでいってしまえば、決壊した左岸に畑をつくっていた人は運が悪かったと嘆き、右岸に畑をつくっていた人は運がよかったと

喜ぶことだろう。そして、普通はそこまでで終ってしまうものである。

しかし、もし破れた方の堤防側に畑をつくっていた人が、この堤防が破れたのはなぜかと考え、それは自分の方が少し低地であったからだ、と悟ることができれば、堤防をより高く築くとか、万一洪水になっても被害が少なくてすむ種類の作物をつくるなどの事後策を思いつくであろう[10]。したがって、それを実践すれば、その後の結果は多少違ってくるであろう。

つまり、失敗や不運を自分に引き寄せて考えるということを一生やり続けた人間と、それを運命のせいにして何もしない人とでは、運のよさがだんだん違ってくるのではないかというのである。すなわち、最終的に成功した人というのは、何か失敗したとしても、人のせいにするよりは、自分がこうしたならば、と考える人なのである。

失敗したことをどのようにとらえ、考えるであろうか。その時の姿勢が成功者をつくり、また失敗者もつくるのである。

人間は常に自己革新を続けながら進歩していくものであるが、露伴はこの自己革新の方法には、二つのものがあるという。それは、他によるのと、自らするのとの二つの道、つまり自力による自己革新と他力による自己革新である[11]。

一般に自己革新というと、自力で行うことの方がいいことであるかのように思われている。しかし露伴は、他力による自己革新も悪いものではないという。では、他力による自己革新とはどういうことなのか。それは、例えばこういうことだと露伴はいう[12]。

よく世間にある例であるが、それほど能力のあると思われなかった人が、他人に付き添って数年経ったかと思ううちに、意外に能力のある人となって頭角を表わしてくる、ということがある。よくよくその人を観るとかつての不勉強の人ではなく、現実に発展していて、今の幸運に結びついている場合も不思議ではない、と思われるようになっている。これが、露伴のいうところの他力による自己革新である。

一方、自力による自己革新はどういうものであろうか。これには、たいへんな努力が必要とされる。「今までの自己が宜しく無いから、新しい自己を造らうといふのであるのに、其造らうといふものが矢張自己なので有るから」[13]である。これは、自分で自分を変えることの難しさを指摘しているわけだが、その可能性について露伴は「殆ど不可能」といいきっている。あえてそれをやろうというのであれば、「今までの自分を一刀の下に斬って捨てて、何も残っていないようにしなければならない」[14]というところまで徹底しなければならないというのである。

### 4. 幸福三説の展開

さて、そのようにして人が福を得たときにどうするのか。露伴はここで「幸福三説」ということを説く。

まず、「惜福の説―幸福三説第一―」は、『成功』の明治43年11月号に掲載されたものである[15]。

そこで露伴は、「幸福不幸福というものも風の順逆と同様に、畢竟は主観の判断によるのであるから、定体はない。しかし先ず大概は世人の幸福とし不幸とするものも定まって一致して居るのである。で、その幸福に遇う人及び然らざる人とを観察して観ると、その間に希微の妙消息があるようである。第一に幸福に遇う人を観ると、多くは『惜福』の工夫のある人であつて、然らざる否運の人を観ると、十の八、九までは少しも惜福の工夫のない人である。福を惜む人が必ずしも福に遇うとは限るまいが、何様も惜福の工夫と福との間には関係の除き去るべからざるものがあるに相違ない」[16]という。

そして、母親が二人の兄弟に、仕立てのいい着物を贈ったとするという仮定のもと、その対応の様子から惜福とは何かを説明しようとする[17]。

新しい着物を贈られた子どもの一人は、今着ている服がまだ着られるのに行李の中に丸めてしまい、カビと垢だらけにしてしまった。新しくもらった服もすぐに使って着崩してしまった。露伴は、これは惜福のないことであるという。

一方、もう一人の子どもは、母の恩をありがたいと思って、新しい着物はすぐに使わなかった。今までの着物を日常の着物として平服にし、新しい服は冠婚葬祭のような格式ばった席で着るようにした。そうすると、古い着物は古い着物として着終えることができるし、新しい着物も新しい着物として、その新しさを生かすような着方ができる。しかるべきときに新しい着物を着ていくことは、他人に対する敬意を示すことになる。いわゆる「褻にも晴にも」一張羅というような貧乏たらしい外見がなくなることになる。このようにすることが、福を惜むということなのだと露伴はいうのである。

「好運は七度人を訪ふ」[18]という諺がある。どのような人であれ、一度として好運に恵まれなかった人は

いない。それにもかかわらず、ある人は好運を生かし、幸せになる。ある人はいつまでたっても不運であり、不幸である。これは、福を惜しむか惜しまないかの心がけによるところが大きいのである。

露伴は、福を惜しまなかったために不幸を招いた歴史上の人物を何人かあげる[19]。平清盛、木曽義仲、源義経などである。

まず、平清盛はどうであったか。清盛は、それほど戦争が上手かったと思われないが、運よく保元・平治の乱に勝ったことによって源氏を一掃して平家の天下をつくった。その意味では福分があったといえる。しかし、清盛には福を惜しむ心がけが決定的に欠けていた。

日本の半分を平家のものにした清盛は、それをすべて一門の者に分かち与え、しかも自分は太政大臣になった。さらに娘を天皇の妃にして、その子どもを天皇にした。これが反発を招いて、平家の滅亡につながったのである。

その平家を京都から追い払った木曽義仲も、勝った後は乱暴狼藉を働き、滅亡してしまった。義経の場合は、同情に値する。後白河法皇に気に入られたが、兄頼朝を経ないで朝廷の位をもらったことから、確執が生まれ追い落とされることになった。これも「惜福」の工夫に欠けていたのではないか、というのである。

露伴は、福を惜しまなかった例として、日露戦争の話を引き合いに出している[20]。先述のように『努力論』が刊行されたのは、明治45年のことである。まだ、日露戦争から10年も経っていない頃で、その勝利は人びとの記憶に新しかったことであろう。しかし、露伴は戦争の勝利に酔うのではなく、軍隊を無駄遣いすることを冷静な目で戒めている。この露伴の警告は、それから40年後の日本において現実のものとなり、わが国に大きな災いを招くことになった。露伴は、そのことに気づいていたのである。

露伴の指摘はこうである。日本近海にいくら魚がいるといっても、乱獲すればいなくなる。それと同じで、勇敢な軍隊それ自体は国の「福」だが、乱用すると酷い目に遭う。第二次世界大戦の指導者には、露伴の声は届いていなかったのであろう。

次に、「分福の説―幸福三説第二―」は、『成功』の明治43年12月号に掲載されたものである[21]。

さて、「分福」とは文字通り、自分の福を自らがすべて使うのではなく、そのいくらかを他人に分ける心がけのことをいう。

分福と惜福との相違がどこにあるかといえば、惜福が、福を使い尽くさないことに重きを置いているのに対して、分福は、福を分け与える相手が目に見えてはっきりしているのが特徴である。このことを露伴は、「惜福は自己一身にかかることで、聊か消極的傾があるが、分福は他人の身上にもかかることで、おのずから積極的の観がある」[22]といっている。

分福は福を分け与えることであるから、当然のように福は減っていくことになる。これは一見もったいないことに思えるかもしれない。しかし、逆に福を分けないという心がけを考えると、それは実に惨めに見えるものである。

露伴は、「雪隠で饅頭を食ふ」という古い諺を引いている[23]。饅頭を人に見せると分けなくてはならないからと臭い便所の中で食べる。これは、いかにも貧しい風景ではないか。そういうことをするのであれば、自分の分が少なくなっても分けた方がよいと思われる。

さて、日本において、「分福」の心がけが一番すぐれていたのは誰かというと、それは豊臣秀吉であると露伴はいう[24]。徳川家康は、惜福の工夫については実にすぐれた人であったけれども、自分の部下に対してあまり多くの知行を与えなかった。徳川恩顧の大名といっても、石高はせいぜい十五万石である。

しかし秀吉は、実に気持ちよく何十万石という知行を与えた。しかも、加藤、福島、前田、蒲生など、初めからの家臣だけではない。途中から家臣になった者にも、惜しげもなく福を分け与えた。

少しでも手柄を立てると、何十万石も与えられるのであるから、「臣下たり旗下たるもの如何ぞ主君の為に鷹犬の労を致して、血戦死闘せざらんや」[25]というように、家臣たちの働きが違っていたのである。このあたりに秀吉の人間心理を読むに長けたところが見てとれる。一雑兵から頭角を現してきた秀吉ならでは、といえよう。

一方、家康については、蒲生氏郷の伝記の中の一逸話をもって、次のように語っている[26]。

秀吉に万一のことがあったら、次は誰が天下の主人になるだろうかという話題になったときに氏郷は「それは前田の老父だろう」といった。「前田以外では？」と問われると、「自分だ」といった。さらに「徳川殿はどうだ？」と問われると、笑いながら「徳川のように物をくれ惜しむものに何ができるものか」といったというのである。

露伴はこの氏郷の言葉について、「徳川公の短所に中って居て、東照公の横ツ腹に匕首を加へたものである」[27] といっている。要するに、家康の痛いところを突いているというのである。

しかし、それにもかかわらず家康は天下を取った。これは、どういうことであろうか。その理由は、ひとえに家康が長生きしたからである。家康が、二、三年早く亡くなっていたら、徳川幕府はなかったといってもいいだろう。

逆に、徳川幕府が滅亡した理由は、氏郷が指摘したように、家康が福を分け与えなかったことにある、と露伴は見ている。つまり、家康は譜代大名に大きな土地を与えず、それが維新前まで続いたため、徳川家のために力を尽くそうと思っても、力が弱くてどうしようもなかったというのである。その結果、関が原の敗者であった毛利・島津などの外様大名に負けてしまうことになった。これは、事実その通りであったといっていい。

「太閤は惜福の工夫において欠くる所があった代りに、分福の工夫においては十二分であり、東照公は惜福の工夫において勝れて居た代りに、分福の工夫においてはやや不十分であった」[28] というのが、二人に対する露伴の評価であるが、これは正鵠を射ているといえそうである。

さらに、「植福の説―幸福三説第三―」は、『成功』の明治44年１月号に掲載されたものである[29]。

露伴は、福を論じて最も重要なのは、「植福」であるという[30]。では、植福とは如何なるものであろうか。惜福や分福との相違は、どこにあるのであろうか。

惜福とは自分に廻ってきた福を大切にすることであり、分福とはこれを分けることであった。これらはいずれも、いわば福の処分の仕方に関わる心がけなのである。

しかし、植福は「福をつくる」ことである。つまり、植福とは「我が力や情や智を以て、人世に吉慶幸福となるべき物質や、清趣や、智識を寄与する事」であり、「人世の慶福を増進長育するところの行為」[31] なのである。

中野孝次は、次のようにいっている。「露伴が幸福三説のとどめになぜ植福をもってしたかを考えるとき、わたしははじめて露伴がこの書の題名を「幸福論」としないで「努力論」としたかがわかったように思った。幸福とはあくまでも一個人の心に関わることであるのに対し、露伴が理想としで抱く福とは、社会に生きる人みなに幸福をもたらすようなものでなければならなかったのである。自分一個の幸福だけではダメなのだ」[32]。

さて、この「植福」に、二重の意義があると露伴はいう。それは、「自己の福を植える」ことと「社会の福を植える」[33] ことである。福を自分のものにとどめておくのではなく、社会全体の福とすることが植福である、というのである。このことを露伴は、林檎の木を植えることに譬えて、次のように説明する。

まず、林檎の木を植え、適宜芽を摘みながら木を長持ちさせることは惜福にあたる。そのようにして、裕に実った果実を自分ひとりが味わうのではなくて、他人にも分けて皆で楽しむことは分福である。では、植福とは何かといえば、林檎の種を播いて木を殖やしていくことである。それを繰り返すことによって、「無量無辺の発生と産出とを為す」[34] ことができる。これは自分のためにもなるし、他人のためにもなるし、また子孫のためにもなるわけである。

## 5. おわりに―「世代間倫理」の先駆的思想―

これまで考察してきた『努力論』の「幸福三説」の中には、現代の環境倫理への関わりが見出される。それは、「植福」であり、「世代間倫理」の先駆的思想であるといえる。

では、「世代間倫理」とは何であろうか。それは、現在を生きている世代は、未来を生きている世代の生存可能性に対して責任がある、という思想である。

渡辺昇一は、次のようにいっている。「植福の精神でいちばんわかりやすいのは、木を植えるという精神です。木が大きくなったころは、植えた人は死んでいますから、その恩恵は着ません。それでも植えるという精神が重要だと思います。数年前、私は伊勢神宮の式年遷宮に呼ばれていきました。非常にうれしかったのは、式年遷宮の行事計画のひとつの重要な部分に、『三百年後の式年遷宮のために木を植える』ということがあったことです。二十年ごとに建て替えていって、三百年後、これから十五回目の建て替えに使われる木が二、三年前に植えられました。この話を聞いたときに、伊勢神宮のやっていることは日本のよい面を象徴しているなと思いました。鎮守の杜も、木を切らないためにいろいろな木が生えていて、森の姿として非常にいいものになっています」[35]。

ここで、渡部昇一は伊勢神宮の式年遷宮の際の植樹を例にして、あえて「日本のよい面を象徴している」

といっているが、実は未来のために「木を植える」のは、日本だけのことではない。

アメリカにも、有名な実践例がある。実在の人物、ジョニー・アップルシードは、19世紀初頭のアメリカで、西へ西へと広がっていく開拓地を旅し続けて、林檎の種を播き、林檎の苗を植え続けたという。そして、林檎と一緒に暖かい心を届け、多くの人々に感謝されたという話が残っている。ジョニーの言葉として、次のようなものがある。

ジョニーは言いました。
「アメリカは、うーんとうーんと、広い広い国
広い広いアメリカを、切り開くため
たくさんたくさん、りんごの木を植えて
そして
実ったりんごは、甘くてみずみずしく
アメリカの人々を、勇気づけるにちがいない」[36)]

また、フランスにはフィクションであるが、有名な『木を植えた男』というのがある。以前は、何も生えていなかった土地に、「三年前からこの人里はなれた土地で彼は黙々と木を植えているのだという」[37)]というのである。

さて、現代日本には「3000万本の木を植えた男」として知られる、横浜国立大学名誉教授の宮脇昭という人がいる。宮脇は、「私は三〇年もの間、小中学生のみなさん、ときには幼稚園児や九〇歳を過ぎた老齢の方など、あらゆる年齢のあらゆる立場の人たちと一緒に木を植えてきた。その数は国内一三〇〇ヵ所以上、海外を含めると一五〇〇ヵ所にのぼり、共に植えた幼木は三〇〇〇万以上になる」[38)]という。そして、宮脇は森の重要性について、「人間が消えても森は育つ。しかし森が消滅すれば、人間は生きていけない」[39)]といい、さらにまた「木を植えるということは、まさにいのちの木をこころに植えることである」[40)]という。

以上のように、幸田露伴の『努力論』における「幸福三説」は、他の幸福論に類を見ないような独自性を持つだけではなく、「世代間倫理」の先駆的な思想として現代的意義をも持ちうるといえよう。

## 文　献


1）渡辺昇一：先知先哲に学ぶ人間学，p. 10（致知出版社，2004）
2）幸田露伴：露伴全集 第二十七巻，p. 299（岩波書店、1954）
3）同前，p. 578
4）鈴木貞美：『努力論』とその時代，井波律子・井上章一編：幸田露伴の世界所収，p. 181（思文閣出版，2009）
5）同前，p. 197
6）同前，p. 200
7）露伴全集 第二十七巻，p. 321
8）同前。
9）露伴全集 第二十七巻，p. 322
10）露伴全集 第二十七巻，p. 324
11）露伴全集 第二十七巻，p. 332
12）同前。
13）露伴全集 第二十七巻，p. 334
14）露伴全集 第二十七巻，p. 336
15）露伴全集 第二十七巻，p. 581
16）露伴全集 第二十七巻，p. 336
17）露伴全集 第二十七巻，pp. 344－345
18）露伴全集 第二十七巻，p. 346
19）露伴全集 第二十七巻，p. 348
20）露伴全集 第二十七巻，pp. 351－352
21）露伴全集 第二十七巻，p. 581
22）露伴全集 第二十七巻，p. 354
23）露伴全集 第二十七巻，p. 355
24）露伴全集 第二十七巻，p. 362
25）同前。
26）露伴全集 第二十七巻，p. 363
27）同前。
28）露伴全集 第二十七巻，p. 364
29）露伴全集 第二十七巻，p. 582
30）露伴全集 第二十七巻，p. 366
31）露伴全集 第二十七巻，p. 367
32）中野孝次：「解説」，幸田露伴：努力論所収，pp. 319－320（岩波文庫，2001改版）
33）露伴全集 第二十七巻，p. 367
34）露伴全集 第二十七巻，p. 365
35）渡辺昇一前掲書，p. 58
36）リーフ・リンドバーグ：りんごの木を植えた男 ジョニー・アップルシード，稲本正訳（アーバン・コミュニケーションズ，1992）p. 14
37）ジャン・ジオノ：木を植えた男，山本省訳，p. 23（彩流社，2006）
38）宮脇昭：苗木三〇〇〇万本　いのちの森を生む，p. 24（日本放送出版協会，2006）
39）苗木三〇〇〇万本　いのちの森を生む，p. 9
40）苗木三〇〇〇万本　いのちの森を生む，p. 176